
ワタリドリ

はるき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワタリドリ

【Nコード】

N4489Z

【作者名】

はるき

【あらすじ】

幽遊白書の幻海師範が中心のストーリー。

彼女が新たに取った弟子と、次元を超えてハンター×ハンターの世界に乱入。主人公は幻海、そしてその弟子の山伏烈也^{ヤマブシレッヤ}。

問答無用で暴れまくる幻海に、魂が抜け落ちそうになりながらもついていく弟子。

人間、妖怪、盗賊、変態、暗殺者。様々入り乱れながらも、弟子は成長するかもしれない。幻海は新たな人生を歩み出すかもしれない。そんなお話です。

霊力^{オーラ}に念と考えているため、勝手すぎる蘊蓄捏造多数なので、了解した上でお読み下さい。

私は幻海師範が大好きです。幻海師範は最強です。しかも若返る
かもしれません。

暴力表現有り。

前章（過去）（前書き）

幽遊白書、ハンター×ハンター。両作品をご存じないと、読んでも意味が分からないと思われる。

幽遊白書の幻海師範が中心のストーリー。

彼女が新たに取った弟子と、次元を超えてハンター×ハンターの世界に乱入。主人公は幻海、そしてその弟子の山伏烈也^{ヤマブシレッヤ}。

問答無用で暴れまくる幻海に、魂が抜け落ちそうになりながらもついていく弟子。

人間、妖怪、盗賊、変態、暗殺者。様々入り乱れながらも、弟子は成長するかもしれない。幻海は新たな人生を歩み出すかもしれない。そんなお話です。

霊力^{オーラ}念と考えているため、勝手すぎる蘊蓄捏造多数なので、了解した上でお読み下さい。

私は幻海師範が大好きです。幻海師範は最強です。しかも若返るかもしれません。

暴力表現有り。

以上、了解した上で楽しみ下さい。

前章（過去）

夢のような、ひとときだった

俺は流星街と呼ばれる、世界のゴミ溜めに生まれた。

この世界の存在は、二種類に分けられる。仲間と、それ以外。

仲間は、助けなくてはいけない。傷つけてはいけない。

仲間は、俺を守ってくれるから、俺も仲間を守る。

それ以外は、俺から奪うから、それより多く奪わなくては生きていけない。

それ以外は、俺を傷つけるから、その前に逃げるか殺すかしてはいけない。

絶対の不文律だった。

当時9歳の俺は、その不文律に従い、仲間と共に生活をしていた。

仲間以外の人間は、俺たちから搾取しようとする獣か、俺たちが搾取するための獲物でしかない。

俺たちは、それなりに上手くやっていたと思う。

最も強かったのはウヴオーで、コイツは早いうちから能力が開花していたのか、力比べならばその辺の大人にも負けなかったし、リーダーの俺は賢かったから、滅多に窮地には陥らなかった。

けれど、その時期は最低だった。

流星街から膿のように溢れ出す人間のクズをどうにかしようと、

はた迷惑なボランティア団体が外からの流星街の立ち入りやゴミ捨てを規制し始めたのだ。外から入ってくるものがなければ、流星街はあつという間に困窮する。外からのカモががいなければ、子供の俺たちには食事を得ることが難しくなった。生粋の流星街の人間から、ものを奪うのは子供ばかりの俺たちには難しかった。

「おなか、へったね」

がりがりに痩せたシャルが、力なく呟く声に、限界を悟った。

このままでは、順に死んでゆく。体力が無くなれば、物資を得るのはますます難しくなっていくだけだ。

「クロロ？どこに行くの？」

無言で立ち上がった俺に、パクノダが声をかける。聡い彼女は、何かに気付いたか。

「何でも良いから、探してくる」

「クロロ」

パクノダの細い声を無視して、歩きだした。

俺たちが、どんな大人がいるグループにも属さないのは、俺たちなりの誇りと守りたいものがあるからだ。

庇護を与える大人は、必ず見返りを要求する。そうでない奴なんて、もっと信用出来ない。

一番多いのは体だ。

女のマチやパクノダはもちろん、顔の整っている俺やシャル。

この顔を利用して外に出るとしたら、行く先は娼館か、変態の籠の中だ。

俺たちは、守りたかった。仲間を。誇りを。

「20000ジェニーで、買ってくれないか」

「……………いいぜ」

前々から、俺を粘着質な視線で見ていた男は、俺の言葉に直ぐに乗った。

連れて行かれてプレハブの残骸の前に来たとき、後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。

「クロロ！」

マチの声だ。いつもながら勘が冴えている。横にパクノダが、ふらつく脚で走ってきた。

「クロロ、ダメだよ！」

マチは、こういうことをひどく嫌う。分かっている。けれど餓えというのは、どんな嫌悪も覆すんだ。

力なく落とされるウヴオーの肩。何に対してぶちまければいいのかわからない怒りを、己を抱きしめて閉じ込めるノブナガの落ちくぼんだ目。今にも息を止めそうなシャルの声。マチの瘦けた頬。艶を失ったパクノダの髪。

走馬燈のように流れる、メンバーの姿。20000あれば、まだ少し、生きながらえる。それだけだ。

「クロロ……………帰るよ」

骨の浮いた手が、俺の腕を掴む。

「できると思ってたのか」

不気味な声に、びくりと震える。

餓えと絶望で、どうかしていた。最悪だ。俺と、マチと、パクノダ。こういう奴が、最も好む俺たちは、他のメンバーと固まって行動する必要が常にあったのに。よりによってこの三人で、大人の前に出てしまった。

流星街の報復は陰惨を極める。チーム内の一人を殺して、他のメンバーの自爆覚悟の報復を受けるなど日常茶飯事のため、相手が子供の集団でも、抑止にはなるのだ。けれど今、俺たちがここに居ることを、他の奴らは知らない。

「ちょーどいいや」

止める。

「お前ら三人は、色んな奴が目え付けてたんだ。他のガキどもを警戒して、なかなか引っぱってこれなかったが……」

「逃げる！」

言い様、以前拾ったナイフを抜く。男の脇に向けて思い切り突き刺そうとしたが、男も流星街を生き抜き、長老の護衛もする猛者だ。俺はあっさりと吹き飛ばされた。

「クロロ！」

頭の中が揺れて、視界が定まらない。マチとパクノダの腕を、男が捻り挙げる。

止めてくれ。お願いだから、止めてくれ。何でもする。何でもするから。

無駄だと知っていても、心が叫ぶ。

コイツは、俺たちを味わった後に、どこかに売るだろう。

たった一度生まれた隙が、絶望への扉だった。

二人も、狭いプレハブの中に叩きつけられる。

止める。弱っているんだ。死んでしまう。

男が入ってくる。壊れたように涙を流すマチと、疲れ果てたように表情を失ったパク。二人を背に庇うために、俺は体を引きずる。歩いてくる男は、人間には見えなかった。

怪物だ。俺たちを喰らう、怪物だ。

頬を、冷たい涙が伝うのを感じ、諦めに目を閉じようとした途端、男の体が宙を舞った。

「がっ！」

男の体は、プレハブの壁に激突し、全体を揺らした後に床に落ちた。

男がつい今し方まで立っていた場所には、代わりに小柄な女が立っていた。

「……………父親だったか？」

女の問いに、首をふる。そんなわけがない。

「そうか」

なら良い、とでも言いそうな調子で、女は肩を竦める。逆光で顔がよく見えない。

くるりと背を向ける女。

「ま、ってくれ」

咄嗟に声が出た。振り返る女に、何かを願いたかった。けれど、何を願いたいのかわからない。わからない。

「水を汲んでくる。待ってな」

女が扉から出て行く。胸を震わせていた、意味のない期待が、急速にしぼむ。

「クロロ」

パクノダに呼ばれて、我に返る。

あの男を、殺さなくてはいけない。

報復される可能性は高いから、今のうちに殺さなくてはならない。落ちたナイフを拾い、躊躇うことなく男の胸に突き立てた。

「殺したのか」

意外なことに女は、言葉の通りに戻ってきた。

俺たちは、男の体から多少でも役に立ちそうなものを探して奪っているところだった。

隣でマチの体が激しく強ばる。俺も、内心でひどく動揺した。殺したことはどうでも良い。けれど、その死体を漁っているところを見られたことが辛かった。そして、辛いと思う自分に驚いた。

こんなの、当たり前のことなのに。そうしなくては、生きていけないのに。

「悪い？」

マチが、女の言葉に反動的に返す。清潔な身なり、健康的な身のこなしの彼女に、反発する気持ちが表れていた。
「いいや」

女は無関心にそう告げると、そこから拾ったのだらうペットボトルに汲んできた水と、三つの果実を俺たちの側に置き、自分は離れて床に座った。

ゴクリと、俺たち三人の喉が同時になった。

その赤い果実は、樹海の険しい木の高いところにはか成らず、大抵は鳥や獣が食べる。彼らが誤って落としたもの、ごくたまに手に入る貴重品だ。手にとつて、迷う。仲間たちも、アジトで飢えている。新鮮な果実は、良い値になる。

女が、自分の手に持っていた果実に歯を立てる。しゃくりと音がして、甘い匂いが届いた。

マチが、つられるように食べ出した。続いて、パクノダ、俺も、とても我慢出来なかった。

汁気が喉の渴きを癒し、胃に滑り落ちる。涙が溢れ出した。先程までの恐怖も絶望も、果実一つの甘さに淘汰されていく。俺たちが皮から種まで食べ尽くして顔を上げると、女はまだゆっくりと果実を嚙っていた。

鼻を吸る俺たちの事など知らぬげに、壊れたプレハブから見える、西日を見つめていた。

あれほど美しい女を、見たことがない

落ちてゆく太陽に、赤く照らされた横顔が、美しかった。大きな瞳は少しつり気味で、頬は赤ん坊のように滑らかだった。小さな桜色の唇が、柔らかな線を描いていた。

物思いに耽るように、一心に西日を見つめ、女はたてた右膝に、

腕を乗せていた。

呆然と見つめる俺たちに気付いたのか、果物の芯を投げ捨てた女が振り返った。

「家に帰んなくて良いのか？」

「家、なんて、ない」

「そうか」

彼女はあまり関心が無さそうに、呟いた。

「腹が減ってるなら、何か取ってくるが」

思わず腹を押さえる。無償の好意なんて、信じる生き方はしていない。けれど、俺たちは既に彼女の持つてきた果実も水も、腹に収めてしまっている。彼女が薬でも入れていたら、既に遅い。

意を決して頷くと、女は、今度は男の死体を片手に引きずり、空のボトルを持ってまたふらりと外に出て行った。

「マチ」

心細そうなマチ呼ぶ。俺の判断は大抵の場合採用されるが、マチの勘も同じように信じられている。

「やな感じはしない」

「そうか」

十分だ。マチまで騙されたのなら、もう、俺たちは終わりなんだろう。こんなへマをして、仲間に合わせる顔もない。

いや、言い訳だ。俺はただ、まだ彼女の側にいたかった。

彼女が臓器ディーラーでも、傍迷惑なボランティアでも、娼館の斡旋でも、たとえマチとパクを巻き込んでも、それでも、まだあの顔を見ていたかった。

その横顔が、どんな細工物より、好んで読んだ優しい物語より、教会の聖母の絵より、ただ俺の心を奪っていた。

ガタガタとプレハブの外から音が聞こえたとき、俺たち三人は飛び上がった。

またしてもぼうつとしていたが、男の仲間がいつ来るかもしれない場所なのだ。

飛び出すと、そこにいたのは彼女一人で、俺たちは腰を抜かさなければかりに安堵した。

「どうかしたか？」

「……………さっきの、男の、仲間が来たかもしれないと、思った」「ああ」

と頷くと、軽く腕を組んで考え込んだ。

パクが、無言で俺の袖を引っばる。振り返ると、樹海の巨獣が死んでいた。

息を飲み、女と獣を見比べる。さっきの果実をどうやって取ってきたのかも不思議だったが、今度はますます訳が分からない。

イノシシ、という動物に似ているらしいが、その5倍はある凶暴な獣は、喉をぱっくりと裂かれ、内蔵も出されている様子でそこにある。

「移動しておくか」

女は呟き、プレハブの中にイノシシを投げ入れる。

……………あり得るのか？

小柄な女の腕は細く、力を込めたようにすら見えなかった。

流星街にいるのだから、念能力者、という存在は知っている。しかし、ここまで凄まじい物なのか？

俺たちが馬鹿みたいに口を開けている間に、女は拾ってきたのだろう枯れ木だの、ドラム缶だの、鍋だのを、ばいばいとプレハブの中に投げ入れ、それから、プレハブを肩に担いで持ち上げた。

……………

夢なんだろう。

俺たちは、あの男に殺されたか、気絶させられて、夢を見ているんだ。

脳みそが現実を否定するが、両側から怯えて身を寄せる二人は、確かにいる。

「いくよ」

女は一声声をかけ、それからどんと歩いて行く。

ついていっていいのか。こんな、存在に。

いつも冷静でいなければいけないリーダーとして、俺は迷ったが、心は既に決まっていた。マチとパクにも聞こうと思ったのだが、こういうとき、女の方が度胸が良いらしい。

「いこ、クロロ！」

どれくらいぶりに聞いた、マチの明るい声。パクノダも、目を煌めかせて俺の手を引く。

「ああ、いこう」

俺たちは三人とも、もう、彼女について行けるのなら、どこでも良い気がしていた。

彼女は懐から出した糸一本で、手際よく獣を捌いていく。ナイフを渡そうか迷ったが、それは、男を刺し殺したナイフだ。

普段気にならないことが、妙に気になる。

手伝いを申し出たが、彼女は気にするな、といって信じられない速さで火を興し、肉を焼いていく。

滴る肉汁を鍋で受け止め、細切れにした肉とキノコ類、ナッツや香草と一緒に煮込む。

渡された肉を貪り食いながら冷静に（矛盾しているようだが）、彼女が相当に過酷な状況にも慣れていることを分析する。男の死体を見ても、眉一つ動かさなかったし、この手慣れた様子からして、旅慣れている（そういうレベルでもないが）のかも知れない。

「一つ、聞いて良いか」

俺たちの食べるペースが、ようやく普通の欠食児童並みになったところで、彼女が口を開いた。

「ここは、どこなんだ？」

俺たちは顔を見合わせた。

本人の言うことには、彼女はここにどうやってきたのか分からないらしい。気がついたら居た、といていた。

「ここは、流星街だ」

「聞いたことがないな」

「人でも物でも、何でも捨てられる、世界のゴミ溜めだ」

「へえ」

初めて、女の表情が動く。小さく目を見開き、そしてその目がそつと伏せられた。

「そうか」

「……あなたも、捨てられたの？」

パクが、気遣うように言う。いつの間にかいた、というのは、この町ではそういう事だ。

「いや。多分、あたしに捨てたいものがあつたんだろう」

火をじつと見つめ、彼女は苦笑する。

「なにを？」

「名前かな」

「名前？」

驚くマチに、小さく頷き、彼女は己の掌を見つめた。

「無力なときに、大層な名前を持つてるのは、苦痛でな」

彼女が無力とは思えなかった。

力持ち、とかそう言うことではなく、纏う空気が、全てを立たせる強さを孕んでいたから。

マチとパクは、腹が満たされた後、随分がんばっていたが、そのまま火の側で眠ってしまった。

俺は、その後彼女と、夜が更けるまで話をした。

彼女は、武道家であること、昨日仲間と、道を違えたこと。そんなことを少しだけ話しただけで、後は俺に話させた。

俺は、知る限りの話をした。仲間のこと、本で読んだこと、噂で聞いたこと、自分が想像する外の世界。

彼女に語るのに、ふさわしいことだけ話そうとすると、柄にもなく緊張した。

必死で話し続ける俺に、彼女は何度も休めと言ったが、俺は止めなかった。

彼女が、おそらく朝になったら強制的に戻ると言ったから、俺は眠るわけにいかなかった。

朝まで起きていれば、引き止められるかもしれない。

そんな希望とも言えない願望のために、俺は必死で話を続けた。

「もう休め」

「いやだ」

俺の体をマチたちと一緒に横たえようとする彼女に、抵抗する。

「声が枯れてるよ」

「いやだ！」

彼女は苦笑し、湧いていた湯に、香草を投げ入れる。

「飲みな」

「止める！」

それは、きつと、眠りを誘う薬草なのだ。

むんず、と鼻を摘まれ、適温の湯が鍋から直接流れ込む。ひどい、と俺は泣いた。

ねむったら、もう、あえないかもしれないのに、ひどい。

おやすみ。そう澄んだ声が聞こえ、俺は耐えきれずに闇に沈んだ。

翌朝起きると、やっぱり彼女はいなかった。

先に起きていたマチは唇を尖らせ、パクは泣く寸前の様な表情だった。

彼女の座っていた場所には、捌かれた肉が、葉に小分けに包まれ、いくつもの果実と木の実が盥の様な物に入れられていた。

そして、わざわざ探してきたのか、ご丁寧に歪な台車も側にあった。

俺は、こちらを伺う二人に、笑いかけた。

全く笑えている気がしなかった。

俺が知る限りで、一番残酷な女だった。

夢のような一時を、手に入らない美を俺に見せて、その名すら教えずに消え去った。

今でも鮮明に思いだす。

象牙色に輝く艶やかな肌。夕日の朱に似た髪と、小麦色の瞳。

信じられない力を持つ細い腕。伸びた背筋。

俺の頬に触れた指先の温かさ。

俺は大人になり、強くなった。

並の才ではなかったし、今では樹海の巨獣も一撃で倒せる。

小さなプレハブくらいなら、難なく持ち上げられる。

けれど、彼女より自分が強いとは思えなかった。

彼女が戦う姿すら知らないのに、俺は、彼女には勝てない気がした。

多くの念能力を奪い、己の力を高めた。
どれだけの念能力を集めても、彼女を捕まえられらるるとは、思えなかった。

俺は盗賊になった。

絵画、宝石、彫刻、人。

幾つもの美しいものをこの手に取った。

俺が望む、美しい物。

全く、満足しなかった。

手に入れてしばらくは、鑑賞に値するように思える。

けれど、全てはあつという間に色褪せる。

彼女を思いださせるものはなく、彼女程美しい芸術も人も、俺は見つけられない。

数多の宝石も、彼女と並べれば、その髪を飾るのすら、ふさわしく思えなくなった。

彼女が知らない星ばかりだ、と苦笑していた夜の空を見上げる。
彼女はおそらく、この空の下にさえいてくれない。

プロローグ（前書き）

本編の始まりにあたり、あらためて警告です。

この作品は二次小説であり、捏造された設定、登場人物の性格の解釈の違いなど、多数存在するはずです。

以上のことを踏まえた上で、お楽しみ頂けたならば幸いです。

プロローグ

俺の名前は山伏^{ヤマブシ} 烈也^{レンヤ}。

猛々しい名前だが、実際の所は普通の性格。どちらかというところ無口で温厚である、というのが自己評価。

そんな俺に、人と違うところが一つだけある。

霊感が強く生まれついたのだ。

中学に入るまでは、困ったこともなかった。何でもないとこころで背筋が寒くなったり、視界の端に影が走ることが人よりちょっと多い、っていうくらいのもだった。

しかし、中学に入っただけで、おかしなものを見るようになった。腕がちぎれた女の人や、頭から角が生えている人が見えたり。

気が狂ったのかと思った。

けれど、そんな俺の元に霊界からの使者がやってきた。中学二年の時だ。

名前は、ぼたん。明るい彼女は親身になってくれて、対処法をいくつも示してくれた。俺が望んだのは、霊能力者として自活する道。両親からも、友人たちからも離れて。

言い訳をさせて貰えば、妙なものを目撃するようになって以来、俺が何も無いところで叫んだり、挙動不審になったりすることで、周囲が既に俺から完全に遠ざかっていたんだ。家族も、友達も。

ぼたんとは会うまでは、本当にいつ死のうか、明日死のうか、って

くらいに追い詰められていたから、彼女が霊能力者に住み込みで弟子入りするって手もあるよ、と言ったときに飛びついた。迷わなかった。

そして俺は出会った。

気味の悪い山の奥。立派な佇まいの寺から、小柄なおばあさんが出てきて、ぼたんを睨み、一言。

「あたしはもう、弟子は取らんよ」

そりゃねーだろって、焦った。ぼたんはこれ以上ない指導者だっ
て言ってたし、彼女に弟子入りすれば、魑魅魍魎に煩わされること
なんかないよ！って太鼓判だったんだ。俺は精神的に切羽詰まって
たし、彼女が最高っていうんなら、もう中途半端なとこに弟子入り
するくらいなら自殺してやる！って訳の分かんない焦燥があった。
土下座して、地面に頭擦りつけて喚いた。それまでの人生で一番必
死だった。

紆余曲折を経て、俺はその幻海師範げんかいしはんに弟子入りをすることが出来
たのだが、そこら辺は省く。

修行前の試練とかあれやこれやとか……うん。考えると師範に
弟子入り出来て良かったっていう気持ちだが、微妙なことになるから
な！

ある意味で俺は運が良かった。

師範が以前に取っていた弟子、浦飯うらめし 幽助さんゆうすけというのだが、彼は妖怪になってしまっていたのだ。

呪われたのかな、とか妖怪に体に乗っ取られて……とか、グロイ想像をしていたのだが、聞いてみれば元々妖怪の遺伝子を持った人で、人として死んでから妖怪になって、不老不死ライフを楽しんでいるらしい。

彼の武勇伝を、ぼたんは沢山語ってくれた。

すごい人なのだ。色んな意味で。

幽助さんに初めて会ったとき、勘だけは秀でている俺は、怖くて震えが止まらなかった。彼が幻海師範に殴られて、出来るだけ力を抑えて接してくれるようになってから、ようやく普通に話せたくらいだ。

師範としては、彼に戦闘のための技は大体伝授したので（ぼたん曰くこれは大嘘なのだそうだ）俺には医療方面とか、仙術を中心に教えてくれている。これは俺が望んだことで、霊界からの要請でもあったらしい。

俺は戦闘は苦手だし、特にしたいとも思わない。しかし『見える、霊力が高い』以上、ある程度鍛えなければ問題が多いので、最低限はする。でも、どちらかといえばこの力で、自分の健康を維持したり、ひとの病気を治せた方が嬉しいと思う。我ながら地味な性格なのだ。

師範の修行は情け容赦がなかったけれど、俺は逃げ出したいと思っただけは無い。自分でも不思議だ。身体の鍛錬はもちろん、勉強も学校とは比べものにならない程させられたのに、俺は師範との生活が好きだった。

そんな、俺と師範の平和で過酷な師弟ライフが一変したのは、幽助さんの仲間だという、桑原さんくわはらという人のせいだ。完全に彼の所

為である。

師範を訪ねてきた彼は、俺が弟子入りしたことに驚き、ほんの少し寂しそうな顔をした後、豪快に笑って俺を励ましてくれた。不良っぽい姿とは反対に、繊細さと優しさを持つ人だと思った。

そして、彼は自分の能力を見せてくれた。

次元を切り裂く剣なんてものを見せられて、俺は目を丸くした。そんな俺に、兄貴肌の彼はノリノリで実演をしてくれてしまって、師範が戻ってきて、彼を怒鳴りつけたときにはもう遅かった。

俺は一つの次元の裂け目に引きずり込まれた。

師範が咄嗟に追いかけてきてくれなければ、俺はその行き先でたれ死んでいただろう。

なにせ着いた先は、人の命が紙の如き軽さの、HUNTER×HUNTERの世界だったんだから。

プロローグ（後書き）

本編は烈也視点を中心に進行していきます。
彼は師範崇拜の強い15歳です。

第一話 (烈也+クラピカ視点) (前書き)

ようやく第一話です。ポケポケの弟子視点ですので、あまり深く考
えてはいけません。

第一話 (烈也+クラピカ視点)

幻海師範と俺、山伏烈也が次元の狭間に落ち、行き着いた世界は HUNTER x HUNTER。

しかも落ちたのが流星街ときたものだ。桑原さん、俺たちが元の世界に戻れた暁には、師範に半殺しにされて下さい。マジで。

身なりの良い(普通だが)俺たちを襲おうとする人間を師範が蹴り飛ばし、この場所を流星街と聞いた後、どこだが気付いた俺に説明を求めた。俺はバクバクと鳴る心臓を宥め、師範に人気漫画の世界であることを告げた。師範は、ほほお、と言ったきり、それ以上の説明を求めなかった。

俺は話そうとしたぞ!?流星街というのがどういう場所かとか、ここを本拠地に置く危ない集団があることとか!

でも師範は、「興味ないね」の一言で、俺を無視。さつさと森に入って、奇怪な生物を仕留めて夕飯の準備を始めた。常人の俺とは胆の入りが違いすぎます、師範 orz

師範は俺に最低限のことしか言わず、身分証の入手がハンター試験以外では難しいことを知ると、俺に山の中(流星街からは直ぐに出た)で修行させている間にちよくちよくと出かけ、金を手に戻ってきた。と思ったら、二人でハンター試験を受けることを告げた。

……………俺、死ぬ自信しかありません。

「師範、本当に俺も受けなくちゃいけませんか?」

「しつこいね。しばらくここで生活するなら、身分証くらい合った方が良さだろう」

「師範が持っていれば……………」

「あたしだけ戻ってしまうことも、あり得なくはない。大体、お前だってあたしの弟子として半年以上修行をしたんだ。そこの人間にや負けやしないよ」

いえ、負けます。この世界には師範の他にも、様々な能力を持つハンターや変態や盗賊がいるんです。この世界で師範が、どのくらいのレベルにいるのか、俺は判定しようがないし、師範が一般人より遥かに強いのは確かだろうけれど、ちょっとは不安を抱いて下さい！

……………と、言いたかったのに、最初の一言でぶん殴られた。心配してるのに…………。

「ステーキ定食、弱火でじっくり」

師範がそう言った時、俺の口からは魂が半分くらい抜けていったと思う。

信じたくないが、これは原作の試験じゃないか？暗殺家業の御曹司とか新人潰しとか、変態とか変態とかピエロとかいる、まさにその回じゃないか！？いやでも、十年前とか、十年後で、たまたま同じ合い言葉っていう可能性もなきにしもあらずだよな！？き、希望を持って、進め！

エレベーターがチン、となり、俺がぎゅっと瞑っていた目を開けると、既に師範がナンバープレートを受け取っている。

番号は200ジャスト。おれは201。

もしも、アノ回ならば、既に、いると思う…………。

見回してもごつい肉の壁で見えない。師範に少しでも原作知識を

元に注意を促そうとしても、興味のない話を聞くのが嫌いなこの人には、やかましいとド突かれるのがオチだ。俺が師範の分も警戒しなくてはならない！

師範に鬱陶しがられながらも、ぎよるぎよるとあたりを警戒していた俺は、新たに入ってきた人物を見て地面にめり込んだ。

俺の原作知識なんて、小学校の時だよ！中学に入ってから漫画なんて読む余裕無かったしさ。だから記憶はボヤボヤんだけど、これだけインパクトのある顔は覚えてるよ！イルミだよ！ギタ、何とかの姿で！カタカタきこえてくるし！見た目だけでもこええよ！いきなり膝を突いた俺を見て、師範が入ってきた男に注目する。

「ふん」

師範が鼻をならす。それは、彼を見ての余裕っスか？それとも、強いのが来たという判定ですか？

俺も、師範の元で見る目は養われているから、彼の靈気が他の奴と比べものにならないのは分かる。なんだか堅そうにその身の回りを取り囲んでいる。少なくとも俺より洗練されているだろう。

対して師範の靈気は、普段ほとんど感じない。ぱつと見、本当に普通のおばあさんなのだ。姿勢や仕草で、ただ者じゃないって分かる奴は分かるらしいが、俺はそこら辺の目はあまり肥えていないから。やっぱりイルミと師範を比べるのは俺の能力じゃ無理なのだ。

俺にとって幻海師範は、世界で一番コワイが、世界で一番強いのは違うので、もうちょっと危機感とか、警戒とか！頼みます！俺の命も師範に丸ごと預けるしか無いんですから！

そんな風にびくびくしていたら、いつの間にか原作の主人公が現れていた。

感動したい場面だが、俺はそんな余裕はない。靈力は多そうだけれど、全く練られていないから脅威とは感じない。放置！と思っていれば、クラピカが驚いたようにこちらを見ていた。

あ、師範を見てるのか。

確かに不思議だろう。ぱっと見の年齢は60前後（実年齢は80近い）の婦人だ。目つきは悪いけどな！レオリオやゴンも目を見開いてこちらを見ていた。

「ぎゃあああああ！！」

そして、主人公組を観察していたら悲鳴が聞こえた。俺は知っている。覚えている。原作最初の血まみれシーンだ。あ、天井に霊気が見えると思ったら、腕が二本、ぶら下がっている。

悲鳴に続いて聞こえた声に、俺のうなじの毛が逆立った。

……………妖怪に近い気がした。

師範と住んでいるんだから、妖怪との面識は多いし、戦闘も経験した。でも話し方の抑揚が妖怪に近い人間がいるとは、思わなかった。しかも、『やな感じ』の妖怪に近い。

師範がちらりと俺を見て、それから指でコインを弾く。遠くでゴツツと岩の削れる音がして、男の二の腕がぼとりと落ちた。

……………

何してんすか、師範！！

アレだよ、ヒソカに注目されそうなことしたよな！？今、まさに！

俺は火事場の馬鹿力で師範の腕を掴むと、周囲がざわめいている間に移動した。

「烈也、なにやってんだい」

「いいいい、いいから！来て下さい、師範！」

いいですか、アレはやばい奴です！変態です！ピエロです！と口に出す前にげんこつ喰らった。

ひどいです。俺は師範を守ろうとしてんのに。

まあ、さっきの場所から移動出来たから良いけど。あ、ゴンたちのすぐ側だ。

「こんにちは！」

「……やあ」

原作の世界に関わって良いのになって、少し思ったんだが、俺がどうしようと師範を止めない限り原作は変わるだろう。そう開き直って、少年たちに笑いかける。

「オレはゴン！お兄さんたちは？」

「俺は烈也。こっちは俺の師匠で幻海師範」

「ほお、武術か何かの師弟か？あ、私はクラピカといいます。ゲンカイさん、レッヤ」

「レオリオだ、よろしく。えっと、心源流拳法っすか？」

「いや、靈光波動拳という流派だ」

「……すまない。浅学ながら存じ上げない」

お年寄りには、随分と丁寧な年長の二人に、俺は少し感心した。「だろっね」

対して師範は素っ気ない。いつものことだ。

「お前の知識の中にある人物なのかい？」

「あ、はい。ゴンは主人公です」

一次試験が始まった。後方で走りながら、師範が彼らについて聞いてきた。

「この試験、お前はあたしから離れて受けな」

「ええ！？」

いきなり無茶を言われた。

「死にそうになったときに、近くに居たら助けてやる。甘ったれて

ないで、とつと行きな」

そんな条件付きの助け手を当てにして良いのだろうか。ってか、俺は一人じゃマジで無理です！

「さっきの奴らと一緒に行動するくらいは許してやるよ」

ケツケツと笑い、師範は俺を前方に吹っ飛ばした。

「あれ、レツヤさん！」

「……お前今、走ってきたか？」

怪訝そうなレオリオに、ひらひらと手を振る。師範に吹っ飛ばされましたとは言えない。背中痛いですが、師範。

「レツヤ、ゲンカイさんはどうしたのだ？ご婦人をおいてきたのか？」

「いや、師範が甘ったれてないで、自力で試験受けるってさ」

クラピカが険しい目で見てくるが、俺だって、師範の側にいた方がどれほど安心か！！

「そうか、良い師弟関係なのだな」

「………多分？」

「ん？」

「いや、オレが師範の弟子としては不出来でさ」

「？………弟子とは未熟だから、弟子なのだろう？これからだろうに」

「まあ、そうなんだが」

兄弟子というか、先人のなあ、幽助さんがすごいのもあって、俺はかなり過ぎた師を得ているって思うよ。

戦闘ではどうやって追いつけません、治癒仙術関係で頑張るので、許して下さい、師範。

「あんたが？何とか拳の？」

「霊光波動拳だよ」

あ、これはキルアだよな？本当に銀髪だ。

「全然聞いたことねえや」

へって感じで言われて、カチンと来る。そりゃこの世界にはなく

ても、元の世界では本当にすごいんだ。どちらもほとんど師範に会えはしないが、弟子入り志願も挑戦者もひっきりなしで、師範の元には師範を慕う妖怪も人間の人も多く訪れる。師範より強くなった人たちだって、師範には頭が上がらないし。

「レッツヤ、こっちのガキはキルアだってよ」

「ふーん」

レオリオが、荒い息の下から教えてくれる。多分、俺が力チンとしたのに気がついたんだろう。気を遣わせたが、素っ気ない返事しかできない。レオリオにはすまないが、師範を軽んじられると、滅茶苦茶腹立たしい。

今まで経験したことなかったしな。師範を訪ねてくる人間も妖怪も、襲ってくる奴以外は、みんな師範に厚い敬意を抱いてるから。

クラピカが少しだけ困った顔を見せる。ほんとに、ガキでゴメンよ。

「レオリオ、鞆持とうか？」

謝罪の意味を込めて、既に息が上がっているレオリオを気遣うと、年長二人の視線が和らぐ。

「……スマン、実は抱えて走るのしんどくなってきた」

「ほいよ」

「レッツヤ、は、余裕そうだな」

「あー、そういや思ったよりは平気だな」

まあ何せ、幻海師範のしごきは、本当に死ぬ一歩手前まで行くから。蘇生させる自信もあるからだと思いたいが、俺が死の淵を覗いても師範は全く気にしない。実際に俺の心臓が止まったことは無いそうだが。

洞窟を抜けるまでに、俺は年長の二人とは、随分仲良くなった。

詐欺師の罠に入ったとき、俺は迷った。

多分、この辺りでレオリオたちは危ない目に遭う。相手はヒソカ

だつたはずだ。

彼ら死ぬ訳じゃないはずだけど、俺はどうすべきか、己の行動に迷った。気付かぬふりで離れて走るか、それとも、一緒にヒソカに立ち向かうのか。俺と一緒にいてもあまり役に立たないけれど、この世界は既に漫画じゃない。俺が吸っている空気は現実だ。レオリオが、死ぬこともあるかもしれない。クラピカもだ。どうするか。ぐだぐだと迷っている間に、悲鳴が上がり始めた。ヒソカの霊気が動く。まずいな、思ったより早く始まった。

気配を消して近づき、様子を伺う。

ヒソカが、三人の人間と対峙している。それから、どうなるんだっけ？

思いだそうとしている間にも、事は進む。レオリオの霊気が、かくつと落ちた。まずい、助けなきゃ、と咄嗟に出た瞬間に、ヒソカが吹っ飛んだ。

「冗談でも何でも無い。10メートル近く離れた木に、ヒソカが半身で激突した。

「とつとと行くよ」

師、師範！？何したんスか、今！？

師範はいつの間にかレオリオを肩に担ぎ、前方に走っていく。仰天していたゴンとクラピカ、それに俺も、咄嗟に付いて行った。

「す、すごいね、ゲンカイさん！」

「し、しかし、大丈夫なのですか？ヒソカを蹴り飛ばすなど………」
「うるさいね」

師範はレオリオを肩に担ぎながらも、動揺する俺たちがついて行くのがやつとのスピードで走る。

「師範！あまり無茶しないで下さい！」

「だまんな馬鹿弟子。力の差も分からずに、出ようとしたお前に言われたか無いね」

お見通しですね。つまり、師範の見立てでは、俺はヒソカに敵わ

ない。分かっていたけれど、地獄の修行をこなしている身としては、はつきり言われるとちよつと傷つく。

「あ、レツヤも、助けようとしてくれたのか？ありがとう」

「いや、師範の言うとおり、俺じゃ何も出来なかった」

師範に一人で受けると言われたのに、早速助けられて、立つ瀬がない。

「ゲンカイさん、遅れましたが、ありがとうございます」

「ありがとう、ゲンカイさん」

「気にせんで良いよ。行く手に邪魔なのがいたから蹴飛ばしただけさ」

「そ、そうですか」

うん、まー、助けられたつてのは、半分くらいの恩で良いと思う。

師範はやりたくなきやどんな善行も悪行もしない。多分、重い殺気を放つヒソカが鬱陶しくて蹴り飛ばしたつていうのも、本当だろう。

「烈也、コイツと一緒に進む気なら、お前が担ぎな」

「あ、はい！」

ポン、とレオリオの体が俺の背に乗る。お、重い！こんな肩に担いで疾走してた師範は、やっぱり偉大です。

「じゃあな」

師範が一言言い、あつという間に見えなくなった。

「す、すごいな……」

「すごいね！ヒソカとどつちが強いのかな？」

クラピカの賛辞に続いて、ゴンが無邪気すぎる質問を投げってきた。

クラピカ

ゲンカイとレツヤ、と名乗った師弟二人組は、試験会場で一目見たときから浮いていた。

若くガタイの良い男たちに混じつて老女がいるのも不思議だった

し、その横の男も、立ち姿はすつきりとして、武人と言うよりも、どごその書生という雰囲気だ。

老女はひどく小柄で、橙の髪と鋭い目が印象的だった。男は黒髪黒目で、平凡でこれといって特徴のない容姿だ。

ただ男がざわめく会場内で微動だにせず直立し、なおかつ眼だけが警戒するように動く様子が気になった。

無駄な動きを僅かもしない、という所作は、達人の域にいる者かもしれないと頭をかすめる。

すると唐突に、青年が横の婦人の腕を掴んで近づいてきた。

無邪気に挨拶をするゴンと、用心深い様子で答える青年。近くで見れば、ごく普通の青年と婦人だと思った。武道家らしいが、レツヤには殺伐とした雰囲気がるでなく、ゲンカイさんは偏屈な老人という感じだったが、それ以上のことは感じなかった。

二人に対する認識が一変したのは、ヒソカと対峙したときだ。

レツヤは、いつから自分たちの側に潜んでいた？そして、接近の気配さえ感じさせず、ヒソカの体を一蹴りで吹き飛ばしたゲンカイさんは、一体何者なのだ？

一族が滅んだときから、自分は強さに対して敏感になった。世の高名な武術家ならば、大抵の名前を知っていると思っていたが、その認識を覆される。レツヤに幾度か探りを入れたが、彼はなかなか用心深い。師範だからなあ、と意味不明な言葉で煙に巻いてくる。ゴンがレツヤに懐いた様子を見せるので、悪人とは思えないのだが、食えない男だと思う。

洞窟の道のりを息一つ乱さずにクリアし、今もレオリオを担いで平然と走っている。そしてなぜか、二次試験会場が分かるらしく、迷い無い足取りで進んでいく。更には、この霧の中を見通すかのように、左右に迂回し、どうやら危険を避けている。

付いていく身としては頼もしい限りだが、得体の知れなさは増していく。

なぜ、最初の集会所で自分たちに近づいたのか、聞いた
ただしいと思うと同時に、自分の緋の眼について知らせてしま
ったことに、背筋が寒くなった。

第一話 (烈也+クラピカ視点) (後書き)

幻海師範は怖いものなしの超人ですが、弟子はごく普通の感性を持ち合わせた天然です。

第二話 (烈也視点)

オレたちは無事に次の会場へと辿り着き、キルアと合流した。

二次試験会場にヒソカが現れたときは汗が吹き出たけれど、本人は至極上機嫌そうに見えた。ゴンに向けてにつこりと不気味な笑みを見せ、彼の周囲のオレたちに視線を走らせたあとは、関わってこようとはしなかった。

そして二次試験開始。

豚は大した課題ではなかったが(サバイバルはあの山寺に住んでいたら自然に身につく)、寿司の課題をどうするかオレは迷った。オレが下手に動くと、試験がどう動くか想像が付かないし、しばらく傍観しようかなと日和見を発動したら、直ぐにレオリオの大声が寿司ネタをばらした。流れについて、オレも走る。そういえば師範が見えないな。

というか、川魚って、ネタになるのか？寄生虫とか……もしかして、向こうの世界と違って普通に生で食べるのだろうか。

気になってクラピカに聞いてみたら、彼はハツとして、捕った魚を取り落とした。

「……………しかし、海などないし」

「寿司ねえ……………」

「レッヤ、もしかして、スシってどんなのか知ってたの？」

ゴンは鋭いな。人の言葉の中のニュアンスをかぎ分ける嗅覚は師範並みだ。

「知ってるけど、寿司って、ちゃんと作るのに何年も修行しなきゃいけないものみたいだから」

「そこまでのものを求めてはいないんじゃないか？」

普通そう考えるが、後の展開を知っていると、半端なものをわざわざメンチ試験管に持っていく気もしない。

「まあ、作ってみよう」

オレはやる気無く、小枝で泳ぐ魚を貫いた。

無理でした。

形をオレが知っていたから、みんなで頑張つて握つたんだがメンチさんは厳しかった。流石プロだ。

焼いてみたりもしたけど、オーケーがでない。むしろ怒られた。

「悪！！おなかいっぱいになっちゃった！試験終～～～了～～～！！」

まあ、予想通りだ。ニンジャが寿司のなんたるかをばらした所為で、あつという間に長蛇の列だったし。

この後、再試験があることを知っているオレは気楽である。お湯に緑茶粉を溶かして、ズズツと啜る。

「合格者は一人！！」

吹いた。まて、困る。

「あんた、誰も合格出さなかったじゃねえか！」

だよな！もつと言えニンジャ！

「真つ先に一人来てたのよ。合格者は200番一人！」

師範かよ！！いや、ここでイレギュラー出すとしたら他にいないんだよ。

てか師範、弟子の合格チャンスまで踏みつぶさないで下さい！見回しても小柄な師範は見つからない。200番を探す他の奴らも、きよるきよるするだけだ。

「200番で、ゲンカイさん？レツヤの前だよな？」

「ああ、そうだ」

あの人、一旦嵌ったものは極めるまで凝るからな。70年の人生の中で、寿司に嵌ったことでもあったんだろ。無駄に多芸って言う

か。いつの間にも持って行つたんだ？作るところ誰も見ていないだろ。怒鳴り合う試験管と受験者の波の隙間に、師範発見。ゴンたちと一緒に寄っていく。

「師範、一人で合格しないで下さい」

「甘ったれんじやないって言つたらうが」

言われると思ひました。でも、これは年の功が出過ぎの課題じゃないか？

「ゲンカイさん、何食べてるの？」

「ひつまぶし」

椀によそつてぱくつく師範の前の桶にあるのは、確かにひつまぶし。

ひつまぶし………？

「その手があつたか！！」

「アホだね、お前は」

そーだよ冷静に考えたら、ウナギがあるし、いつそ卵でも作れるじゃん。師範の敷地内で、取って蒲焼きにしたことだつてあるじゃないか。ほんとにアホです、オレ。蒲焼きにしてきたウナギにも申し訳がたたない。立たなくても良い気もするが！

ゴンが桶をのぞき込んでから、師範を見上げる。なつっこいな、この子。

「オレもお腹減つたな。もらつちやダメ？」

「構わんよ」

「ありがとう、ゲンカイさん！キルアたちも貰つて良い？」

「残つてるのは好きにしな」

師範のひつまぶしは上手かった。この森のものは何でも旨いのか、ウナギも旨かった。

試験官二人の羨ましそうな視線を無視して、オレたちはネテロ会長が来るまでひつまぶしを貪り食つた。

ネテロ会長の取りなしにより、オレたちは無事、クモワシの卵を取って合格した。うん、そうそう、そういう流れだった。

そして、ここで飛行船に乗るわけか。ちよつと感慨深い。

駆け出す年少の二人を見送り、レオリオとクラピカに早いとこ寝床を決めようと提案する。談笑しながら歩いていると、さわりと背筋に寒気が奔った。

「伏せる！」

咄嗟に声を出したが、そんな必要は無かったようで、二人ともさつと身を屈めていた。

頭の上を飛んだのは、トランプ。嘘！？

「やあ？」

「……………物騒な挨拶だな」

クラピカつて、度胸がある。口を開いた途端トランプが飛んできそう、オレは竦む。妖怪と闘ったこともあるとはいえ、師範が側にいないときに、こんなやばい奴と接触した事って無かったからな。オレは基本的に小心なのである。

「ちよつと聞きたいことがあってね？」

ヒソカがつまむトランプが、手を振ると硬貨に変わっていた。

「これの落とし主を探しているんだ？」

息が止まった。

一瞬のことだったのに、ヒソカの視線がオレに向けられ、唇が弧を描く。

「君のかい？」

「……………いや、違う」

師範が、試験開始前に指弾で弾いたコイン。

「じゃあ、誰の？」

多分ヒソカは、その硬貨で岩を削ったのも、己を蹴り飛ばしたのも、同一人物だと気付いている。

どちらも容易く成せることではないから、そう考えるのが自然だ。

オレの背を汗が伝った。

「聞いてどうするんだ」

クラピカが口を出した。クラピカも、オレの反応で気付いたはずだ。ヒソカが探しているのは師範だと。

「もちろん、返してあげようと思ってるよ？」

「…………… 私たちから、持ち主に返しておこう」

クラピカ、本当にありがとう。ヒソカの笑みの下の圧力が増す中で、クラピカは師範を庇おうとしてくれている。しかし、無駄だろう。

「ダメ、ボクが自分で渡したいからね？」

「…………… 本人に了承を取ってから、教えるよ」

「レッツヤ!？」

「明日、教える」

師範は、多分オレがこの場でヒソカに教えようが全く気にしないだろう。気にするとしたら、口止めを忘れるようなへまはしないけれど、不意打ちで師範を攻撃されることだけは避けたかった。師範が易々とヒソカに後れを取るとは思わないが、不意を突かれるのは避けたい。師範に、きちんとヒソカに警戒するように伝えたい。

「君じゃあ、無いって言うんだ？」

ヒソカに改めて顔を向けられ、一瞬呆けた。

まさか、本気でオレだと勘ぐっていたとは思わなかったからな。

「君も、なかなかやる様に見える？」

「はあ？」

思わず間抜けな声が口を突いて、オレは慌てて右手で塞いだ。

待て。コイツ、師範を捜してるんだよな？師範級の実力者に用があるんだよな？それで、何でオレにそんなこと言うんだ？領域が広すぎだろ。月とスツポンを同一視しているかのような迷走ぶりだ。

ヒソカは、オレの反応を一瞬だけ不思議そうに見て、それからオレの狼狽の理由を悟ったらしい。ニイツと唇を吊り上げた。

「ごめんなさい師範！オレ、コイツの興味を煽っちゃったかもしれ

ません！

「じゃあ明日、絶対だよ？」

クツクツと不気味な笑いで肩を揺らしながら、ヒソカはくるりと背を向けた。

オレは二人に試験前の話をし、クラピカはレオリオに一次試験中の事を説明した。目を剥いたレオリオは、早く師範に知らせようと早く走り出す。

師範の気配を探しながら歩いたら、勘が働いて、トレーニング室に足が向いた。

果たしてそこには、師範がいた。そして、もう一人、その正面にはネテロ会長がいた。

「師範！」

「後にしな」

いきなり切って捨てられた。レオリオとクラピカは、ネテロ会長とにらみ合うように腕を組んで立つ師範に戸惑ったらしく、目を見合わせている。

「ほっほっほ、構わんよ、そちらが先で」

ネテロの言葉に、師範の顔がようやくこちらに向く。

「あの、ヒソカが試験前にコイン投げたのと、試験中に蹴飛ばした相手を探していて、明日に教えると約束してしまっただけです。気を、つ、アダアッ！」

「くだらんことで騒ぐな」

師範のデコピンにより、額から後頭部に衝撃が走り、オレは堪らず壁に絶る。

「言われようと気付かれようと構いやしないよ。用がそれだけなら、とっとと部屋に戻ってクソして寝な」

相変わらず口が悪いですね。クラピカが固まっています。

「でも、ヒソカは本当に危け、イタイ！」

「お前、自分の師匠を、相手の力量も分からない能なし扱いしてんのかい？」

「滅相もございません！」

師範が声に怒気を込めると、オレの背筋は勝手に伸びる。条件反射って言うより、もはや本能である。

「じゃあ、その件は良い。鬱陶しくなりそうだが、どうせ試験が終わるまでだ」

「でも……………」

「で、そっちはなんなんだい、ジジイ」

オレの声は、完全に無視された。その短気なところ、この年になつてからじゃあ直らないだろうなあ。会長もジジイ呼びわりだし。

面白そうにこちらの話を聞いていたネテロさんが、師範に視線を当てる。

クラピカが気を遣ってレオリオと去っていくが、オレは、好奇心が抑えられない。心配もあるし、知らないと不安だしね。主に師匠が何をやらかすが。

「いやの、うちの門下のモンが、泣きついてきての」

「何のことだい？」

「幻海と名乗るバーサンと決闘して、宝玉ミストアトルを奪われたとな」

「あん？あたしが持ってた石に目を付けて、自分の持つてる宝石と賭けて戦いたいと言ってきた小娘を倒した覚えはあるが、奪ったと言われるのは心外だね」

師範がネテロさんにメンチ切っている。ガラ悪いんだからなあ。

「そうじゃの、言い方が悪かった。そやつの名を、バスケット・クルーガーと言っくんじゃが、わしにどちらか一つだけでも取り返して欲しいというるさくてのお」

バスケット・クルーガーって、漫画に出てきたような……………強かつ

たような……。オレが鍛錬してる間に、師範がどこでどれだけ暴れたのか、今度逐一教えて貰わねば、弟子のオレも思わぬ恨みを買っていることになるかも。……教えてくれないだろうな。

「で、あんたは門下のために、今度は自分が闘いたいと？」

「……………その気があるかの？」

そのまま眼を細めるネテロさんの前で、師範は面白がるように笑みを浮かべた。

「あんたが勝つたら、二つともくれてやろう。引き分けたら、小娘が持ってたのは渡そう。あたしが勝つたら、ハンター協会の所有する書物、現在進行形の事案を除いて、全ての閲覧許可を貰おうか」

「……………ホ、自信たっぷりじゃの」

ネテロさんが、呆れたものか感心したものか、迷ったように中途半端な顔で言う。

「その条件で良いなら、明日の試験前にも戦るか」

「せっかちじゃのお」

「こつちは、正直どれだけ『ここ』に居ることになるか分からない身でね。時を逃せば、勝負することは無くなるかもしれない」

そういえばそうでした。いつまでここに居るんだろう。オレと師範。

ていうか、師範ってネテロさんに勝つ自信あるのかな。ネテロさんが闘うシーンって知らないのだが。

「こつちの立ち会いは、コイツ。死ぬまでやり合う気はないからな」
「良かるう。では、明日の朝6時に、適当な場所に降りられるようにしておく」

ネテロさんは師範に何かを感じたのか闘気をぶつけてきたが、師範には糠に釘、蛙の面にナントカだ。

「わかった」

それだけ言って、師範はくるりと踵を返した。

第二話 (烈也視点) (後書き)

いきなりネテロさんと勝負する幻海師範です。

次話からは、この二次創作独自のifが爆発です。私の幻海師範観がどんどん出てきますので、お気を付けて。

第三話 (烈也視点)

オレと幻海師範は、部屋に入って椅子に腰掛けた。

「師範、何で受けたんですか？」

師範に決闘を挑みたがる修験者は、妖怪並みに後を絶たないが、師範が受けるのは見たことがない。

「奴の靈気の扱い方を、ちょっと見てみたくてな」

師範が興味を引かれるなんて、珍しい。もしかして、元の世界とは違うのだろうか。

「えーっと、勝つ自信が？」

「まあ、負けはしないだろう」

「……………」

ここで疑問を返したら、殴られるだろうなーと迷っていたら、師範が小さく溜め息をついた。

「お前は、今のあたしの強さをどう見る？」

「……ぱつと見の靈力では、オレより弱く見えます。でも、死々若丸さんとの戦闘の時なんかで、たまに若返ると一気に靈力が上がりますよね？」

死死若丸さんは、どうやら師範の若い姿が好きらしくて、たまに師範に喧嘩を売りに来る。本人は報復とか言ってるけど、誰も信じてない。

「現在の弟子であるお前には話しておこう」

そう言って師範は立ち上がった。

「アンテ開」

呟きを漏らした途端、師範の両腕から靈気の帯のようなものが弾

けた、と同時に、師範の内在する靈気の進りを感じて、オレは飛び上がって身構えた。

師範が少しでも抑制の力を抜けば、オレははじき飛ばされると感じ、冷や汗が背を伝う。

「聖光気、というものを聞いたことがあるな？」

美しい女がオレに話しかける。

「せ、仙水さんが、使っていた、人としては究極の闘気、なんです、よね？」

「今のあたしも、聖光気を扱う」

絶句してしまったオレに、師範は小さく息を吐き、それから両腕に靈気の帯をはめ直す。

「幽助が仙水と闘ったときに、あたしもまた、仙水の力を直に感じられる距離にいた」

「……はい」

「己の力で修行するだけでは、身につけられなかった。努力を怠ったことはないし、身につけられないことを悲しんだことも無かった」

師範の姿は、まだ戻らない。オレはこの若い姿を見ると、動揺してしまって困るのだが。

「だが現実には、話に聞いたことがあるだけだった聖光気の力に触れたとき、それを得ることが、己に可能だと知った」

「……………」

「やり方を理解した、といえば、分かるか？」

「何となくなら」

師範は人としては紛れもない天才である。未知の力を手に入れる方法は分からなくても、一度実物に出会えば、その方法を悟ることもあるのだろう。

「そしてあたしは、この力を手に入れた」

「はあ」

あっさり言われると、何とも返しようがないが、師匠はオレには想像出来ない修行の世界に身を置いたはずだ。

「問題はその修得により、体が若返りを始めたことだ」

師範は滑らかな手を、目の前に持ち上げる。

「一時的な若返りではない。あたしの体は細胞を活性化させる方法を知っていて、修行でも何百回とくり返し若返っていた。そしてあたしの霊力は、聖光気にまで昇華させられた」

ようやく、師範の体が老いていく。

「肉体の暴走か、必然なのか、あたしにも分からんが、聖光気を練り続けていた間に、あたしは自分の肉体が、通常状態の時でも若返ってきていることに気がついた」

「そんなことが……」

「直ぐに呪霊錠で抑えたが、お前と初めて会ったときには、おそらく幽助たちと出会ったときより、10歳程若かった」

70にしては若く見えると思っていたが、そんな事情とは思っても見なかった。

「呪霊錠をせずに放っておけば、おそらく短期間でピークの20歳にまで戻り、老いることは無くなるだろう」

不老は人類の夢だ。でも、師範がそれを喜ぶはずはない。だって師範は人として時と戦い、人として朽ちていく道を、すでに『選んだ』人なのだ。方法が無くて不老にならない人とは事情が異なるだろう。

「この先何もなければ、呪霊錠を外すことはない。だが、あたしも武闘家だ。外すべき時には、外す」

「はい」

「先の結果は分からない。あたしは若返って、老いることが無くなるかもしれないし、このまま老いて、死ぬかもしれない」

師範はオレの目を底知れぬ瞳で覗き込む。

「お前には、近いうちに気付かれる気がしたから話した。だが他言はするな。幽助にも、蔵馬たちにも」

「……分かりました」

師範の内心の葛藤は、きっとオレには一生分からない。オレと師

範は、違いすぎる。人間なのに、オレも師範も。しかもオレは、師範の弟子なのに。

それでも、将来縮まるとさえ思えない程高い場所に、師範は立っている。オレは師範の目に見えるものが、見えない。だから、これ以上聞いても、何の助けにもなれないことが、絶望的に理解出来てしまう。

「もう寝な。明日の朝は、試験前に立ち会いをして貰うんだから」
そう言って部屋を出て行く師範を、オレは何も言えないまま見送った。

翌朝5時に目が覚めた。少しばかり興奮していたせいか、体は一気に覚醒した。

師範とオレは、砂の多い荒野に立つ。又メーレ湿原から一転、湯いた場所だ。

そして師範とネテロさんの戦闘前に関わらず、オレは既に疲れている。

この二人は飛行船を最低空させ、ひよいと飛び降りた。最低空つて言っただって、人間が飛び降りれるような高さじゃなかった。断じて。よそから見たら、ただの投身自殺だ。

なのにオレがサトツさんにパラシュート要請しようとしたら、髭のおっさんはあるう事がオレを突き落としたのだ。奇跡的に骨は折れなかったが、早くも帰りたい気分ではいた。殺人未遂だコノヤ

口ウ。

「じゃあ、始めるかい」

「ふむ、時間もなしのう」

飛行船を見送り、潔く向き合う、二人の老人。

師範側の立会人はオレ、向こうはサトツさん。死ぬまではやらないから、どちらかが負けを宣言すれば終わり。

協会の人らしい女医さんが、ビーンズさんと一緒に待機している。

師範は、呪霊錠を外す気は無いらしく、元の姿のまま構えを取る。対してネテロさんが、両手を前で合わせたのを見たとき、オレは咄嗟に5メートルほど飛び退った。

「良い判断です」

直ぐ横に立ったサトツさんが、オレの耳に呟く。

「ですがもう少し離れましょう」

更に5メートル離れると、戦いが始まった。

ネテロさんの能力は、単純さ故に強い。更に年を取れば取る程、経験を積みば積む程、更に強くなっていくたぐいの攻撃だ。百式観音と呼ばれる能力だ、とサトツさんが教えてくれる。

師範は、ひたすらそれを受け流しているが、幾つかは正面から受けて、押されているように見える。

「あなたの師匠も、素晴らしい。会長の攻撃をここまで受けるとは」
サトツさんの感嘆の声は、しかし気持ちが悪くもっていない。

「師範が勝ちますよ、最後には」

断言すると、サトツさんは軽く首を傾げる。

師範は相手の力を、慎重に見極める戦い方をする。ネテロさんも本気でやっていないことは分かるが、師範の方が余裕は多いはずだ。師範は、本気で霊波動を高めないまま、ネテロさんの攻撃の威力を味わっているのだから。

「やるのう」

会長の攻撃が、一時途切れる。

「あんたも思った以上の腕だ。だが、あたしを負かす決定打が足りないな」

「殺し合いじゃないしの」

あちこち千切れている胴着の埃を、師範は払う。そして片頬だけで笑みを見せた。

「確かに、殺し合いより殺さずに勝つ方が難しいな。それに、お前は本物の武闘家だ。相手するのに、手抜きは失礼だったな」

師範が、両腕を前に出す。オレは目を開けていられずに、閉じてしまった。

「^{アソテ}開」

現れるのは、美しいひと。

勝負は師範が勝った。圧倒的に。

「お前さん、どっちが本当の姿なんじゃ？」

ネテロ会長の片腕は、かろうじて繋がっているだけだ。師匠の霊丸で、繰り出した能力ごとふき飛ばされた。サトツさんやビーンズ

さんは真っ青になって心配しているのだが、本人はそれはそれは楽しそうだ。

完敗した直後、この老人は天を見上げて寝そべったまま、長々と大笑した。

「どっちも本当さ。実年齢なら70過ぎてる」

ゆっくりと元の姿に戻った師範は、髪をかき上げてネテロさんを見下ろし、小さな巾着を投げつける。

「ほっほ、良いのか？」

中身はビスケさんから取った宝石だろう。

「別に要るもんでもないからな」

「また戦りたいのう。本気になって負けたのなんぞ、どれほどぶるか」

「これが本気ってんなら、怠けてんだな」

「ばれたか。勘が鈍っておるわ。修行相手になってくれんか？」

「生憎、覚えの悪い弟子を扱くのに忙しい」

オレですか。

「ふうむ。わしも弟子入りするか」

「会長！」

辛抱堪らん、て感じでサトツさんが口を挟む。ハンターたちの長が、ハンター試験受験者に負けたのだから、無理もない。

だがネテロさんはハンター協会会長と言つより、今は一人の武人に戻っている様子だ。戦いの余韻が納まらず、闘気がびんびんとあたりを浸食している。

「冗談じゃ。じゃが、お前さんの扱う技の源流には、心底興味がある。真面目に、再度の挑戦を申し入りたい」

「気が向いたら、また付きあつてやるよ、ネテロ」

ようやくネテロさんを名前で呼んで、師範はそれはそれは人の悪い笑みを見せた。

オレたちは、別に用意された小型飛行船で三次試験会場に向かった。

「ここから72時間以内に地上へ降りること。それが三次試験の課題だ」

パイナツプルの様な試験官さんが説明してくれる。

試験は1時間前に始まっていたらしく、誰も残っていなかった。下で誰かを待たしていたら悪いなあ。

「遅れて悪かったのう」

「構わないよ」

一人でうろろろしていたら、ネテロさんの謝罪に一言返した師範に、床板の下の道に蹴り落とされた。

第三話 (烈也視点) (後書き)

幽白原作にて、突然師範が亡くなっていたときには本気で落ち込みました。

ある意味では、それ故に書かれているこの話。
寿命を延ばすために、無茶な設定であることは承知の上ですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4489z/>

ワタリドリ

2012年1月3日22時47分発行